

平成 19 年度第 3 回運営会議議事録（案）

日 時：平成 20 年 3 月 14 日（金） 10:00～12:20

場 所：日本工学会 会議室

出席者（順不同、敬称略）：

委 員：大輪 武司、川島 一彦、田口 裕也、橋谷 元由、持田 侑宏

臨時委員：永田 一良

事務局：柳川 隆之

配布資料：

SC07-3-1 平成 19 年度第 2 回運営会議議事録（案）

SC07-3-2 CPD WG 報告（大輪主査）

SC07-3-3 ECE プログラム検討ワーキンググループ中間報告（川島主査）

SC07-3-4 CPD 学習ガイド構想案

SC07-3-5 平成 19 年度収支決算（見込み）

SC07-3-6 平成 20 年度事業計画素案

議 事：

大輪理事の司会により議事が進められた。

1. 第 2 回運営会議議事録確認

12 月 25 日に開催された第 2 回運営会議の議事録案が大輪理事から説明され、訂正なく了承された。

2. 平成 19 年度 WG 活動報告

2. 1 CPD WG 活動報告

大輪主査から、標準化ガイドラインの構成を中心に WG で検討してきた内容が報告された。最終的には、昨年度までの検討成果から抜粋したガイドラインの内容と覚書の雛形をつけて、今年度の報告書をまとめる予定であることが示された。これに対して、実現可能な事務局体制や費用などのリソース計画および日本工学会の調整力がどこまで発揮できるか/すべきかについての見通しに基づいて、更に検討を加えてゆくことになった。

検討のなかで委員から出された意見はおおよそ次の通りである。

* 日本工学会内の体制や費用の裏づけを固めておくことが必要である。建設系 CPD 協議会では、14 会員しかいないが、それでもその運営に当初の見込みを越える費用と人が必要になっている。これをしっかり確保しないと実現しない。考え方にも会員間で温度差があり、まとめるのが大変である。どこまで日本工学会が手を伸ばし、どこまで分野別協議会なり学協会がやるかははっきりさせておかないといけない。（川島） ⇒標準化はゆるいものにする必要がある。（大輪）

* 学協会ですでに出来上がっているものを変えさせるのは難しい。（橋谷）

* 技術者は CPD の情報源を必要としているのは確かである。（持田）

* 進度の差はあるが、学協会の CPD は現在立ち上がり期にあり、まずは立ち上がってもらうことが大切である。何年かすれば組み替えの時期を迎えるはずであり、そのときに基準が役に立つときではないか。（川島）

* CPD は認知度を上げることが必要であり、工学会が認知度を上げるのに役立つことを提供するとよい。（橋谷）

* 原子力分野で CPD 制度を立ち上げようとしており、日本技術士会とコンタクトしている。日本工学会の状況を知らせた方がよい。（永田）

* 建築士会も独自の CPD 制度を持っており、協議会同士の情報交換も意味がある。（川島）

* 日本工学会が強権を発動することはできない。緩やかなアライアンスのもとに独自の発展を遂げてゆくことも意味がある。（橋谷、川島）

* 機械系分野では会員がまだ CPD をあまり行っていない。まず建設系 CPD 協議会のや

り方を提示して、採用は会員に任せるようにしている。(田口)

*電気系でも足並みが揃わないので、とりあえず賛同する団体のみでスタートさせようとしている。(持田)

2. 2 ECE WG 活動報告

川島主査から、これまでのWGでの議論をまとめた結果が報告された。ECEとは何かという概念およびその概念を具体化する講座形態などが提示され、日本工学会でその価値が認められれば来年度以降に2、3の雛形を立ち上げてみる予定という内容である。これを3月24日の協議会総会に提示し、会員の意見を求めることにした。

議論の中で出された意見はおおよそ次の通りである。

*指導者をどうやって確保するかが鍵となる。(持田)

*狙いを技術者にするのか、経営者にするのか定めた方がよい。(橋谷) ⇒両方でもよいが、リーダー格の技術者を主体とするのがよいのではないか。(川島)

*何年かかけて充実させてゆくべきものである。化学工学会でも、30年の歴史を経て受講者が順調に集まっているコースがある。順調になったのは7、8年前からである。受講した先輩がその価値を認め後輩に受講を勧めるという仕組みができています。講師の人選を慎重に行い、懇親会で受講者間の人脈形成を助けることを行っている。この経験から言えば、3年くらいで価値を認められないといけなのではないか。参加費を高くすれば、派遣元で慎重に受講者を選び、レベルの高い受講者が集まる。化学工学会では委員会を作ってコースのプログラムを決めている。4ヶ月間にわたり月1回、各回2日ずつ、合計8日のコースである。(橋谷)

*ECEの一つの例といえそうなので、どういうものか勉強させてもらえるか?(川島)
⇒可能である。受講者募集の案内など、関係資料を送る。(橋谷)

*ECEは企業マネジメントコースの技術版という分かりやすい(川島、永田)

*日本工学会のコースでは異業種分野の受講者が集まるというメリットがある。(橋谷)

*推薦とか選定のプロセスを設けてよい受講者を集めることが大切である。(川島)

3. CPD 学習ガイド構想の提案の審議

永田臨時委員から、企業の中にCPDを展開する仕掛けとして、技術者個人々々のキャリアパスのベース(「私の証明」とすべきCPD学習ガイド構想の提案が行われた。審議の結果、3月24日の協議会総会でこの考えを紹介し、賛同が得られれば、来年度WGの検討事項に加えることにした。

審議の中で出された意見はおおよそ次の通りである。

*土木分野でも「自分の証明」にCPDが含まれている。(川島)

*こういう記録は会社はつけてくれず、自分でつけるものである。学会が手助けすれば、企業にとっての学会の価値が上がる。(持田)

*技術者が自分を守るの大切になっている。CPDは技術者のため、ECEは会社のためという分類も考えられるのではないか。(川島)

*「自分の証明」の記録媒体がどうなるか時間軸上で示せないか?示せば各学協会に提示するとよい。(川島) ⇒この考えに賛同が得られればよく調べてみる(永田)

*日本技術士会をはじめいろいろところでマルチに提案してはどうか?(川島) ⇒日本技術士会では1年くらいかけて構想を描きたい。日本工学会でも検討して、連携してゆきたい。(永田)

*CPDに対する技術者の意識は低い。受講者のガイドは受講への刺激になる。(橋谷)

*入札のためという次元でなく、技術者個人が自分の身を守るという高い志を持って、継続的に能力開発を行うという意識をもたないといけない。(川島)

*日本工学会は過去の成果をwebに掲載して利用可能にしておかないといけない。(川島)

4. 平成19年度収支決算(見込み)および平成20年度事業計画

事務局から第1次案が示され、2,3の修正を加えたいうえで、協議会総会に提案することを承認した。決算では4万円強の赤字を会費収入があるまで一般会計から一時借用して埋めること、予算では会費納付を再開してもらいこれを活動の原資とすることが要点である。

以上